ぐるり散策　大月風土記伝説の巻　井上文次郎

八、【よしが池（心に舞う二）】

昔　甲斐の沼橋と笹子町吉久保の辺を云っていたが、たまたま嘉禄の頃（西暦一二二五～六年鎌倉時代）小俣左衛門尉重澄の娘〔よし〕という子があり、同家に滞在した京都の僧侶玉延に憧れ、意を決して付近の池に投身した。

そして怨念化して妖蛇となり、行人を悩ました時、浄土真宗の開祖親鸞上人が東北巡教の際に済度し、それよりこの所を「よしが窪」と称明せりとの口伝が伝わっている。また徳川幕府の末期までの書類には片平の里、「よしが久保」または「吉ヶ窪村」、「吉ヶ久保村」等と書き、後、「吉久保」という文字を使用するようになったという。

＊葦ヶ窪の由来

往古、甲斐の沼橋と知られる。葦ヶ池は、親鸞の毒蛇済度の伝説によって、比の池を葦ヶ窪、池を「葦ヶ池」と称名せりと口碑に伝える。

昔からの言い伝えに依ると、「よしヶ池」西端に在る地名を「橋詰」といい、東側の地名を「来見坂」という。往古葦ヶ窪一帯は、笹子川の水淀みで沼湖をなす。笹子峠に通ずる道も山裾を通り旅人里人に非常に困難をしいていた。そこで池の中に丸太土石をもって近道を造る。「約三百余間に来見坂～橋詰、この道は、一度に両側から通行能ず。前方より人来たらばこれを見て待ち、人渡り来ざれば渡り行きし」と伝う。故に「来見坂・橋詰」の地名発祥なりしかば自称名なるも今も現存している。

＊葦ヶ池とおよしの由来

往古　甲斐の沼橋として知られる。偶々今から凡いて七百数十年前、後堀川天皇一二二五（嘉禄元年）の頃、この地の地頭、北面の武士（皇居を守るお庭番）小俣左衛門尉重澄、妻よし、（重澄の父は尚家、その妻嵯峨）、重澄の娘「およし」は男共の憧憬の的（美人）なりしが、偶々京都より僧行のための修行僧、若き梃なる僧に思いを致せしが其の意の果てにこの池に投身す。よしの霊は毒蛇と化身し、近隣人々又旅人を恐怖に落としいれたと伝える。

親鸞上人が相州より甲州等々力（甲州市勝沼町）の聖舎、萬福寺に参詣した帰途、地頭重澄宅にたちよってた際、重澄の懇願により、六字の名号を書き記した小石、数百個を三、七、二十一間池の周囲に投入、供養した所、毒蛇に化身した「およしの霊」は成仏し地中に異様な轟きありて「観世音大士」になって昇天し、西南の空高く消え去りて、遠く伊豆の「手石浜」に落ち着き、今も参詣者の絶えまなきと聞く。「手石浜の阿弥陀窟」がそれである。爾来この池を「葦ヶ窪」と称その地を「葦ヶ窪」と称名せりと口碑に伝える。

＊葦ヶ池跡

往古、この地を「葦ヶ池」と称す。この池の起源存在については現今では確たる解明するものも疎し、ただ残された古文書古跡を検べたどる他はない。この池の創々の時期は洪積世代第四氷河期、原平の地が高所沖積層、扇状地帯を形成して来た先端が向の山の下腹に衝突し篠子川の流れを遮断し、川水が滞留し、自然に沼の池が創裡出されたのではないか、今池の跡を深く掘ると、葦草の変化したもの、木の葉沼などの異物が発見される。

＊南伊豆町手石浜の阿弥陀窟の不思議

筆者は昨年十月、南伊豆町手石浜に、およし伝説の由来を尋ねたところ、南伊豆町商工会会長「長田裕二郎」氏に遭い、阿弥陀窟の由来が、笹子の伝説と同様、二百キロ先の彼の地にあり、今日でも、毎年十万人を越える参詣者で賑わう祭典が盛大に挙行されていると聞かされた。また南伊豆町では、この伝説の「阿弥陀窟」を、文化遺産として、町を挙げて保存に力を入れ、国指定天然記念物、伊豆七不思議の一つとして、観光に役立てている。

氏は又「この伝説の縁を機に、大月市民の皆様に阿弥陀窟を見に来ていただきたい。当町としては大月市との、海産物の安価定供や、海の家・山の家などの学童の交流など貴市と当町との観光物産の交易を進める機会を切に望んでいます。」と語られました。

＊ご名号と掛軸

昔、よしが池になげた石の一つと、ご名号の書かれた掛軸を笹子の小俣家から賑岡村浅利六五三の現当主天野忠彦氏（屋号大上）宅に嫁にくるとき持ってきたそうである。

また、山口善久先生のお母さんは浅利の大上の人である。

その後、この大上から今度は娘を真木間明野の後藤さん（屋号カラフリ）宅に嫁にやるとき、この掛軸と石を持参させた。現在も地元間明野の地域の人々は春になると村中でこの掛軸と石のお祭りを盛大にやっているそうである。

参考文献
甲斐国志
北都留郡誌
心に舞う2「岩殿」
故郷道中記笹子乃今昔
南伊豆古跡阿弥陀窟縁起

執筆者　井上　文次郎

四月号へつづく…

←阿弥陀窟

←右　長田会長　中　筆者

←後藤氏宅にあるご名号の掛軸と石